技術・家庭科(家庭分野)における習得・活用を意図した授業のあり方

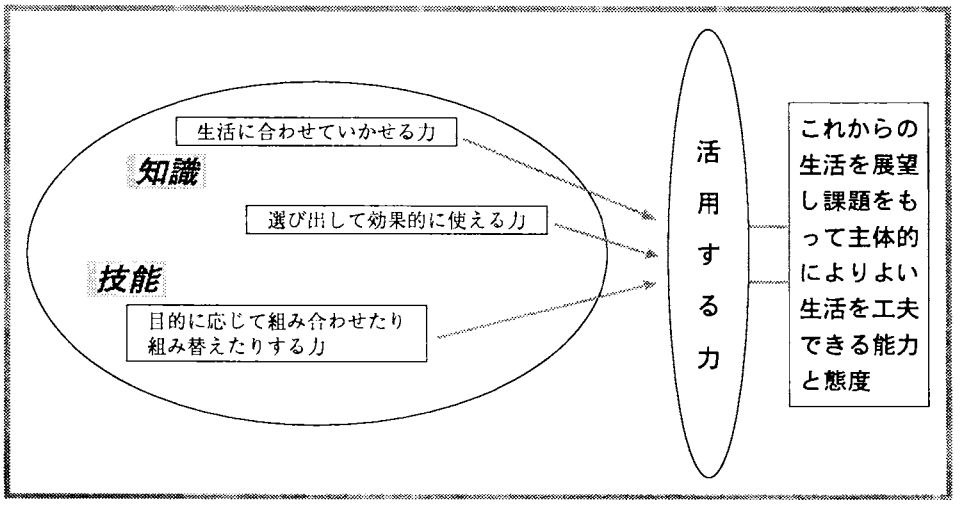
技術・家庭科　中村正寛
橋本正恵

1．技術・家庭科（家庭分野）における習得・活用を意図した授業について

技術・家庭科（家庭分野）の目標は「衣食住などに関する実践的・体験的な学習活動を通して，生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに，家庭の機能について理解を深め，これからの生活を展望して，課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる」である。このなかで新指導要領では特に「これからの生活を展望して」が追記され，この改善をうけて新たに「生活の課題と実践」が指導事項として設定された。この内容は，学習した知識と技術などを活用し，これからの生活を展望する能力と実践的な態度をはぐくむことの必要性から設定されたものである。

家庭分野では実践的・体験的な学習活動を充実させ，実感をともなう理解を深めることからはじまり，主体的に生活を改善する能力・態度の育成が目標となる。中学生段階で育てたい資質・能力として，生活の自立を図ることに重点がおかれており，生活を営む上で必要とされる知識と技術を身につけさせるとともに，生活と技術とのかかわりについて理解を深め，実際の生活にいかしていくことが重要である。この「生活を営む上で必要とされる知識と技術を身につけること」を家庭分野における習得とし，また「実際の生活にいかしていくこと」を家庭分野における活用と考える。小学校での既習内容と日常生活での経験や体験を土台とし，さらに生活を主体的に営むための知識や技術を身につけながら，毎日の生活にいかしていくという繰り返しの中から，生徒が自身の生活を見つめなおし，主体的にかかわっていくようになることが重要である。そのような学習活動の間も生徒はそれぞれの生活を毎日営んでいるわけであり，学校での学習と日常生活での学びは，日々相互に関わりながら存在している。つまり家庭分野の授業における習得と活用はそれぞれが独立してあるものではなく，常に生徒の日常生活と関与しあいながら学習されるものであると考える。

そのように生徒の実生活と密接に関与しあう授業をつくり出すために，①既習の知識や技術を自身の生活の中で繰り返し確認する，②自身の生活の中からそれぞれの課題を発見させる，のポイントに重点をおいた。学んだ知識や実習での技術が一回きりのものになりがちであるということや，小学校の学習事項との系統性が弱くなりがちであるという指摘も考慮しなければならないだろう。



2．技術・家庭科（家庭分野）に関する本校生徒の実態

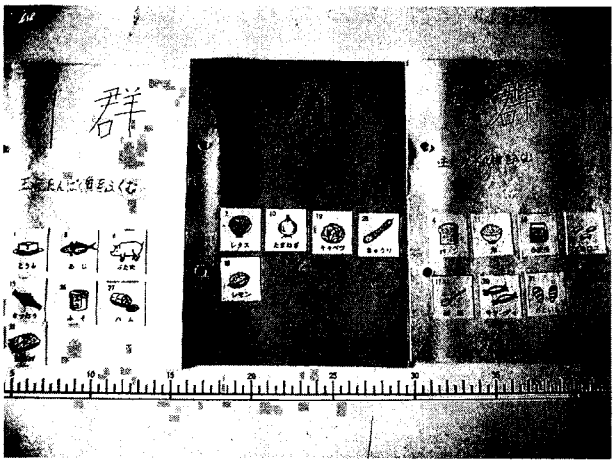
本校では小学校家庭科の内容との連続性を考えた結果，今年度より１年生の前期と２年生の後期とで家庭分野の授業を行い，３年生では技術分野と隔週で授業を行っている。

１年生の食に関する授業では活発に発言する生徒も多く，食品群や摂取量の学習の間にも「栄養バランスが大事！」とか「ビタミン不足はダメ！」などの言葉も聞こえ，全体として食に関する興味は高い。一方，「お米食べすぎたらメタボになるよ。」とか「○○○○○（栄養補助食品の商品名）食べてたらバッチリ！」などの発言もあり，マスコミなどの情報に左右されがちな様子も見える。自分の食生活に関しては，主体的にかかわっていく姿勢はまだ弱く家の人が用意してくれたものをそのまま受け入れるだけ，といった傾向が強い。例えば実際の食生活の問題点として，習いごとや塾へ通うために食事の時間が遅くなることがよくないということには気づくことができても，「仕方がない」「どうしようもない」ですませてしまい，どうにか改善できないか，と考えることはしない。また一日の摂取量の数値などは非常によく覚えるのだが，実際に自分が食べているお弁当の白飯の量がそれに対して多いのか少ないのかといったようなことはあまり考えない。「見当」というようなものが，まったくつかないという生徒も多い。また実習には積極的に参加する生徒が多く，家庭で繰り返して練習するというような課題に対しても，とてもまじめに取り組む様子がみられる。このように家庭での日常生活での繰り返しの場をいかに設定するかが大切である。また半数以上の生徒が附属小学校の出身で，学校給食を一度も食べたことのない生徒が多く，客観的に自身の食生活をとらえる場が少ないことも本校生徒の大きな特徴であろう。

3．技術家庭科（家庭分野）における習得・活用を意図した授業実践例

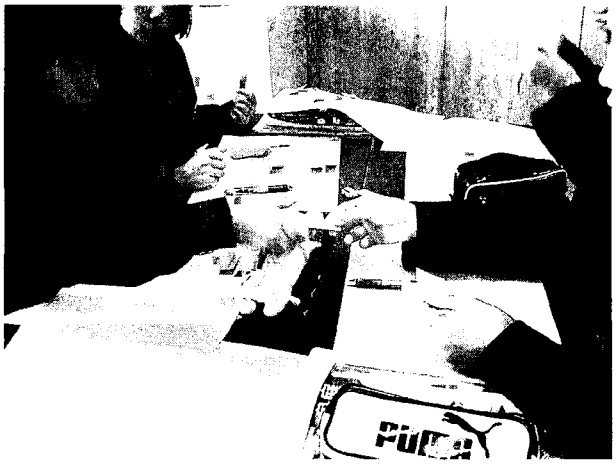
１年生の食に関する分野では，小学校家庭科との関連をふまえ，食品が６つの食品群にわけられることをまず学習した。小学校での３つのグループの分類を理解している生徒が多く，「たんぱく質」や「緑黄色野菜」などの言葉が授業中のあちこちから聞かれることから，小学校の家庭科の時間や食育関連の授業の内容は非常によく定着しているという前提で授業を始めることができた。

毎時間の授業の最初に，６色の色画用紙による分類カード（※１）による確認クイズを行い知識の習得の定着度を確認した。（※２）またそれぞれの授業の最後には，その時間に学んだ知識が生徒それぞれの生活のどんな場面で用いることができるか，ということを考えさせ次の授業までの期間（基本的には１週間）に各自が日常の生活と関連づけて扱えるような機会を設定した。このように，１時間の授業（２時間続きの時は２時間）で習得した知識や技能を生徒が自分の生活の中で活用する場面を設定することで，知識・技能は繰り返し確認されることで，さらなる定着がすすむ。また自信の生活との接点を見つけ出すことで，関心・意欲が高まり生活の中で実践しようとする態度がうまれる。また長期のプランで考えたときには，ひとつづつの知識や技能を繰り返し確認し（習得），生活の中で実践（活用）という繰り返しが，スパイラルをえがいて，生徒ひとりひとりの「生活の課題の発見→解決」という方向へむいていくだろう。（※３）

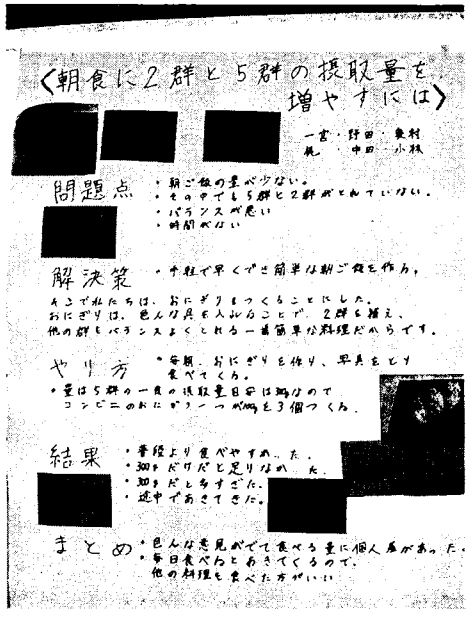


※1　基礎食品群ごとの代表的な食品や摂取量のめやすを6色の色画用紙に表した「6色カード」

※2「6色カード」で確認クイズを行っている様子。毎時間最初の5分程度で行った。



※3-1　自分たちの食生活の課題をあげ，検討している。



※3-2「食生活の課題」の解決を班ごとにとりくんだ発表

4．成果や今後の課題

1時間ごと授業で習得した知識や技能をその後の生活の中で繰り返し用いたりすることは家庭学習のシートなどで促し，確認をすることができた。しかし，直後の時期においては実践する生徒が多く見られたが，次の段階にすすんだ時に以前に学んだ内容までを繰り返す生徒はまだまだ少ない。また，長期休暇中に調理や食事観察などを宿題のかたちで設定すると決められた回数は実践するものの，まだまだ自発的に取り組むという姿勢に至らない生徒が多い。今後は生徒の各家庭との協力態勢の工夫や生徒の自発的な実践を促すような働きかけの工夫が不可欠であると考えている。

また本校の技術・家庭の授業は前期・後期の半年交替でおこなわれることから，1年生の前期で家庭分野を学んだ生徒はまる1年間家庭分野の授業を受けないこととなり，その間にそれまでに学んだ内容をいかに生活の中で繰り返し実践・活用させるのかといった課題も非常に重要なものであると考えている。